

アスリート学生の修学状況可視化支援ツールと
教職員面談が学業意識と成績に与える影響
—計量テキスト分析を用いた修学支援施策の有効性—

The Impact of a Study Progress Visualization Support Tool and Faculty-Student Consultations on Academic Awareness and Performance among Student Athletes: Effectiveness of Study Support Measures Using Quantitative Text Analysis

一ノ瀬 大一¹、百瀬 俊哉²、武谷 信吾³、植村 浩太郎⁴

概要：

2015年にスポーツ庁、2019年に一般社団法人大学スポーツ協会（UNIVAS）が創立された以降、大学スポーツおよびアスリート学生への関心がますます高まる一方で、アスリート学生⁽¹⁾は、競技活動を優先するあまり、学業が疎かになる傾向が指摘されている。本学のアスリート学生においても、一般学生と比較して、GPAが低く修得単位数が少ないなどの学業面に関する問題が顕在化していた。

こうした状況を改善するために、アスリート学生の修学状況を向上させる施策として、修学状況確認シートを導入し、教職員との面談をセットで運用する支援体制を導入した。その効果を検討するために、アスリート学生から自由記述形式で意見を収集したデータについて、計量テキスト分析を実施した結果、この施策がアスリート学生の学業意識を向上させ、修学状況の改善につながっていることが示唆された。

本稿では、これらの施策の具体的な取り組み内容と計量テキスト分析の結果をもとに、アスリート学生が学業と競技を両立するための効果的な支援策について考察する。

Abstract：

Since the establishment of the Japan Sports Agency in 2015 and the Japan Association for University Athletics and Sport (UNIVAS) in 2019, interest in university sports and student-athletes has grown significantly. However, it has been pointed out that student-athletes often prioritize athletic activities over academics, leading to challenges in balancing both. At our university, student-athletes previously exhibited lower average credit acquisition and GPA compared to general students, with academic issues such as low credit completion becoming evident.

To address these challenges, we implemented a support system combining study progress visualization sheets with faculty and staff consultations. To evaluate the effectiveness of this approach, we conducted quantitative text analysis on free-text responses collected from student-athletes. The analysis suggested that this initiative enhanced their academic awareness and contributed to improved academic outcomes.

¹ 学生課長

² 芸術学部 写真・映像メディア学科 教授（前学生部長）

³ 大学改革推進本部係長

⁴ 財務部主任

This paper discusses the details of these initiatives and the results of the quantitative text analysis, offering insights into effective support measures for helping student-athletes balance academics and athletics.

キーワード: アスリート学生, 修学状況確認シート, 教職員との面談, 計量テキスト分析, 学業への意識変容

Keywords: student-athletes, Academic progress tracking sheet, Faculty and staff consultations, Quantitative text analysis, transformation in academic awareness

1 問題の所在: アスリート学生が直面する課題の一つである学業と競技のジレンマ

2015年にスポーツ庁が創設された後、2019年には一般社団法人大学スポーツ協会が設立されるなど、大学スポーツおよびアスリート学生に対する関心がますます高まってきている。大学スポーツに関して、スポーツ基本法第28条には、スポーツの普及又は競技水準の向上を図る上で企業のスポーツチーム等が果たす役割の重要性に鑑み、企業、大学等によるスポーツへの支援に必要な施策を講じることが謳われている^[1]。また、大学におけるスポーツ活動には、大学の教育課程としての体育、研究分野としてのスポーツ科学、課外活動(部活動、サークル活動、ボランティア)等の側面があり、各活動には、身体能力を高める、健康的生活をデザインする、豊かな生活を送る等の様々な役割があるが、アスリート学生にとって大学在学中は、競技力向上のみならず、将来社会で活躍するための必要なスキルや人間形成の面でも重要な時期であると言えるため、大学は、アスリート学生の状況を的確に把握した上で、アスリート学生の学業と競技の両立の支援に必要な施策を講じていく必要がある^[2]。

しかしながら、その具体策としては、アスリート学生の卒業、就職、就職後の状況把握および公式戦や授業を欠席した時の配慮、練習時間に配慮した時間割編成や運動部学生向けのクラス編成、個別学習支援といった学内制度の柔軟な運用を提言するに留まっており、学習支援に関しては、事実上現場に丸投げされているといっても過言ではないと指摘されている^[3]。

加えて、2017年から2019年の3年間におけるスポーツ庁における調査結果^[4, 5, 6]では、大学スポーツが抱える課題として、「学業との両立」や「学業の充実」と回答した大学が上位3位以内に入っていることから、学業と競技の両立は各々の大学が抱えている課題と言ってよいだろう。

このような状況の中、アスリート学生の中には、競技に関連する練習やトレーニング、練習試合、公式戦への出場、およびそれに伴う遠征によって、学業に充てる時間が制約されているため、競技を優先した学生生活を送る結果、低修得単位数や学業不振に陥っていると指摘されている^[7, 8, 9]。

さらに、首都圏の大規模総合大学であるA大学のアスリート学生に対する調査結果では、「学業よりも競技を優先したい」と回答した学生が57.3%、「何をどのように勉強すればいいのか分からない」と回答した学生が42.1%、約20%の学生が「出席をとらないなら授業に出席しなくてもよい」、「勉強しなくてもどうにか卒業することができる」と回答したとの調査結果^[10]があることから、アスリート学生の学業面に関する課題が表面化していると言わざるを得ない。

また、学業不振のアスリート学生は、学業に関するストレスを早い段階から感じていることが明らかになったことに加えて、このような不要なストレスは早急に対処することが重要であると指摘されている^[11]。

要するに、アスリート学生については、学業に充てる時間が制約される中、競技を優先しすぎるが余り、学業不振に陥っているアスリート学生の存在が問題として表面化している。

2 本学アスリート奨学生の修学状況の実態と学業支援の必要性

本学のアスリート学生に関しては、修学費の全額免除および半額免除のアスリート奨学生(以下「アスリート奨学生」という。)、アスリート奨学生ではないが総合型選抜スポーツ型を受験して合格し、入学したアスリート学生(以下、「総合型選抜スポーツ型のアスリート学生」という。)、それ以外のアスリート学生(以下、「その他のアスリート学生」という。)の三つに区分されるが、その中でも特に重点的な課題であったアスリート奨学生の修学状況について触れる。

表1 2016年度の1年次アスリート奨学生の修学状況

2016年度						
1年次						
人数	31単位以上	30単位以下	成績基準達成率	平均出席率	平均修得単位数	GPAの平均
20	17	3	85.0%	83.80%	37.9	1.958

表2 2017年度の2年次アスリート奨学生の修学状況

2017年度						
2年次						
人数	63単位以上	62単位以下	成績基準達成率	平均出席率	平均修得単位数	GPAの平均
20	15	5	75.0%	77.3%	73.8	1.737

表の説明に入る前に、アスリート奨学生に着目している理由を述べる。アスリート奨学生とは、大学が指定した強化指定サークル(強化運動部)の部長と、該当する生徒が在籍する高等学校が、学業面が優れており、競技力が高く、学業と競技の両立が可能であると判断した者を推薦し、いずれかの入試制度で受験して合格後、所定の学内手続きを経て、学長によって決定される学生を指しており、毎年度、アスリート奨学生として1年次生の約20名が認定され、入学している。1年次から4年次までの在籍者を合計すると約80名がアスリート奨学生として在籍している。本学には、学友会体育会系サークル(運動部)が約30サークル存在し、1,000名程度のアスリート学生が在籍しているが、大学側としては、修学費を免除しているアスリート奨学生が、体育会系サークルやアスリート学生の中でも先頭に立って学業と競技の両立を実現して、サークル間競争を活性化させることが狙いの一つであった。しかしながら、アスリート奨学生の修学状況が芳しくないことから、アスリート奨学生に対する継続的な指導・支援が

急務であった。本来であれば、アスリート学生全体をみて学業充実のための指導・支援を展開する必要があるが、その前に、先頭に立つべきアスリート奨学生を重点的に指導・支援をせざるを得ない状況であったため、アスリート奨学生に着目している。

アスリート奨学生の当時の修学状況については、次のとおりである。

表1のとおり、2016年度1年次のアスリート奨学生は全体で20名である。また、2017年度はこの20名が2年次になるため、表2のとおり、2017年度2年次のアスリート奨学生が20名となっている。修得単位数の基準について、本学の場合、全学部・全学科の卒業要件は124単位以上修得が必要であるため、1年次生は、その4分の1である31単位以上、2年次生は62単位以上を設定している。

2016年度1年次のアスリート奨学生は、20名のうち1年次の基準をクリアしているのは17名、基準をクリアできていないのは3名となっており、平均修得単位数が37.9単位、GPAが1.958である。2017年度の2年次についても、基準をクリアしているのは15名、基準をクリアできていないのは5名となっており、平均修得単位数が73.8単位、GPAが1.737であるなど、修学状況は良いとは言い難い状況であった。特に着目すべきは、2016年度の1年次の時よりも、2017年度の2年次において修学状況が悪化している点である。

表3 2017年度の1年次アスリート奨学生の修学状況

2017年度						
1年次						
人数	31単位以上	30単位以下	成績基準達成率	平均出席率	平均修得単位数	GPAの平均
14	5	9	35.7%	72.80%	31.4	1.490

表4 2018年度の2年次アスリート奨学生の修学状況

2018年度						
2年次						
人数	63単位以上	62単位以下	成績基準達成率	平均出席率	平均修得単位数	GPAの平均
14	8	6	57.1%	73.00%	65.2	1.419

次に、2017年度1年次のアスリート奨学生は、例年と比較して人数が少なく、14名であった。表3のとおり、1年次終了時の修学状況を確認してみると、1年次終了時の成績基準である31単位以上をクリアしているのは5名しかいなかった。一方で、成績基準をクリアできていない1年次アスリート奨学生は9名にも上り、成績基準達成率も過去最低の35.7%、平均修得単位数も過去最低の31.4単位であった。

この1年次生が2018年度には2年次生になり、表4のとおり、2018年度2年次終了時の修学状況を確認してみると、2年次終了時の成績基準である62単位以上をクリアしているのは8名となって

いる。一方で、成績基準がクリアできていない2年次アスリート奨学生は6名であり、成績基準達成率は57.1%、平均修得単位数は65.2単位であることから、1年次と比較して多少改善傾向は見られるものの、修学状況が良いとは言えない状況であった。

以上のことから、アスリート学生全体の前に、アスリート奨学生自身のGPAや単位修得状況の改善には、アスリート奨学生個人の自助努力を促進する施策と並行して、大学側(教職員)による組織的かつ継続的な学生支援体制の構築が不可欠である。単に個人の自助努力のみに依存するのではなく、教育的観点から大学が主体的に学業充実のための包括的な支援方策を講じる必要性があった。

3 本稿の目的

本稿では、アスリート奨学生の学業と競技の両立の推進を目的として、アスリート奨学生に対する修学状況確認シートをシステム化したアスリート学生修学状況確認システムを導入したことに加えて、このシステムをカスタマイズした上で、教職員との面談をセットで運用したことについて論じる。加えて、アスリート奨学生の修得単位数などの修学状況および修学状況を向上させるために必要な施策に関する自由記述について計量テキスト分析を用いた分析を踏まえて、アスリート学生が学業と競技を両立するために効果的な支援策について考察する。

4 アスリート学生の学業と競技の両立における目標設定と学業支援の重要性

最初に、アスリート学生の学業と競技の両立意識の醸成に影響すると考えられている目標設定の重要性について取り上げる。目標とは、動機づけられた行動が向かう最終的な対象あるいは状態であると論じられている^[12]。行動は目標をもつことによって初めて方向づけられ、完遂に向けての現実的手段や方略を考えることが可能になると指摘されている^[13]。これに関連して、アスリート学生とそうでない一般学生との間で、大学生活を通じて獲得するキャリア能力で違いがあるのは「目標設定」であることが指摘されている^[14]。

また、本学の2019年度のアスリート学生413名を対象としたモチベーションに関する調査結果において、「目標設定や具体的行動の見える化」が課題の一つであることが示唆された^[15]。

その他にも、アスリート学生の能力開発やキャリアの点に関しては、大学スポーツを行うことによってチームワークや人間関係に上手く対応する能力の向上につながり、結果としてキャリアの初期において高い給与を得ていることが実証されている^[16]。

次に、アスリート学生に対する学業支援、学習意欲の向上、学業への意識醸成に効果的な事例について説明する。アスリート学生は一般の学生よりも、特定の学習場面や学習課題への努力や持続性、忍耐を含む学習意欲は高いものの、学習全般への興味が比較的低く、学習の継続性に課題があることが示され、正課外での学習支援の効果はあるが、アスリート学生の学習特性に基づき、学習に対する不安を払拭し、学習意欲を向上・継続させるための個別相談体制の充実やオンライン技術を用いた支援がより効果的であると示唆されている^[17]。また、教職志望学生向けではあるが、ポートフォリオと

カルテを管理するシステムを開発・試行後に学生アンケート調査を行った結果、被教育体験の振り返りや目指すべき教師像の明確化に影響することが示唆されている^[18]。加えて、ポートフォリオをシステム化することにより、学生や授業担当教員、クラス担任など様々な利用者に対応するために必要な複雑なアクセス制御や任意ファイルをアップロードすることなどの機能の有効性を確認するとともに、電子化することの利点として、保管が容易になることやマルチメディアフォーマットでの成果記録やデータ検索を可能にすることが報告されている^[19]。

4.1 本学アスリート奨学生に対する学業充実のための施策の展開

2017年度および2018年度のアスリート奨学生における修学状況を踏まえて、2019年度から、アスリート奨学生に焦点を絞って、次のとおり学業充実のための施策を展開した。

最初に、アスリート奨学生に関する継続要件を規則化した。規則化する前のルールでは、アスリート奨学生には、毎年度末に修学費免除を継続するための審査がある。その審査では、次年度の修学費を免除するという意味の「継続」、次年度の修学費は免除するが注意するという意味の「警告」、次年度のみ修学費の免除をしないという意味の「一時停止」、次年度以降、修学費の免除をしないという意味の「取り消し」が判定されていた。つまり、規則化以前のアスリート奨学生は、1年次生であれば、年間の修得単位数が20単位未満であった場合に警告になり、その警告が2回続けば、一時停止になり、それでも改善されなければ取り消しになるというルールであった。

1年次生終了時20単位未満、2年次生終了時40単位未満になった場合に、3年次生ではじめて一時停止（修学費の免除を一時停止）となるため、修得単位数の基準も低く、一時停止や取り消しをする時には、留年や卒業延期がほぼ決定している状況であり、アスリート奨学生の学業面（修得単位数やGPA）の改善をすることが困難であるとの判断から、毎年度末のアスリート奨学生の修学費免除の継続要件における修得単位数の基準として、1年次終了時31単位以上、2年次62単位以上、3年次93単位以上を規則化した。この基準を満たさなかった場合は、直ちに次年度の修学費を免除しないという意味の「一時停止」とし、2年連続で基準を満たさなかった場合は、次年度以降の修学費の免除をしないという意味の「取り消し」にした。

これに加えて、2019年度からアスリート奨学生に対する継続的な修学指導・支援の取組がスタートした。アスリート奨学生に対する学業充実のための継続的な指導・支援を開始した当初は手探りでの状況であったが、本学の教学IRデータに基づく中退要因は、主に低修得単位が起因している可能性が高いことから、低学年次（1年次および2年次）に低修得単位にならないよう方針を定め、中退予防13プロジェクト^[20, 21]を参考にして展開した。

アスリート奨学生については、アスリート学生修学状況確認シートの導入はしていないものの、低学年次を中心ではあるが、教職員との定期的な面談による継続指導・支援を行った。アスリート奨学生の2週間毎の出席率を調査して、当該アスリート奨学生の出席率が80%以上であった場合は、引き続き、2週間に1回継続指導・支援の対象になるが、出席率70%以上80%未満であった場合は、

1週間に1回以上の継続指導・支援の対象になり、出席率が70%未満であった場合は、週5回の継続指導・支援の対象になるというものである。また、面談指導・支援を受けるアスリート奨学生に対しては、学業と競技に関する短期的な目標、それに対する行動や結果などを振り返った上で、今後の目標や行動を引き出していく方法を取った。

2019年度の1年次アスリート奨学生19名に対して、継続指導・支援を行った結果、表5のとおり、1年次終了時の修得単位数の基準である31単位以上修得しているのが18名となっている一方で、成績基準をクリアしていない者は1名であった。加えて、平均修得単位数が42.8単位であり、GPAの平均も2.256であるなど、2016年度および2017年度の1年次アスリート奨学生と比較して、平均修得単位数やGPAの平均を見ても、修学状況が良い状況であると言える。

なお、成績基準をクリアしなかった学生1名は、怪我のため授業の出席率が低下してしまい、結果的に29単位の修得に留まったものである。決して、学業よりも競技を優先したのではなく、怪我のため、やむを得ず、授業にも競技にも出席することができなかった状況である。

表5 2019年度の1年次アスリート奨学生の修学状況

2019年度						
1年次						
人数	31単位以上	30単位以下	成績基準達成率	平均出席率	平均修得単位数	GPAの平均
19	18	1	94.7%	87.40%	42.8	2.256

表6 2019年度の2年次アスリート奨学生の修学状況

2019年度						
2年次						
人数	63単位以上	62単位以下	成績基準達成率	平均出席率	平均修得単位数	GPAの平均
13	12	1	92.3%	76.8%	79.2	2.136

2019年度の2年次アスリート奨学生は、全体で13名である。この13名に対して、継続指導・支援を行った結果、表6のとおり、2年次終了時の修得単位数の基準である62単位以上修得しているのが12名となっている一方で、成績基準をクリアしていない者は1名であった。2018年度の1年次アスリート奨学生において、1年次終了時に成績基準をクリアできていない者は2名であったが、継続的な面談（修学）指導・支援を行い、1名に減少した。平均修得単位数は79.2であり、GPAの平均も2.136であるなど、2017年度および2018年度の2年次アスリート奨学生と比較して、平均修得単位数やGPAの平均を見ても、修学状況が良い状況であると言える。アスリート奨学生の継続要件の適用は、2019年度の1年次アスリート奨学生のみであるが、適用の有無に関係なく、出席率に応じて、学業と競技に関する短期的な目標、それに対する行動や結果などを振り返った上で、今後の目標や行動を引き出して

いく方法で継続的に面談指導・支援を行ったことにより、アスリート奨学生の修得単位数などの修学状況に対して一定の成果があったと言える。

4.2 アスリート学生に学業充実のための修学状況確認シートの導入とその課題

2019年度よりも、少しでも効率的・効果的な運営をするために、2020年度からは、前項の継続指導・支援に加えて、学業と競技に関する目標設定と定期的な振り返り（リフレクション）を行い、その内容を踏まえて教職員が面談指導・支援を行うために、図1のアスリート学生修学状況確認シートをアスリート奨学生に導入した。

アスリート学生修学状況確認シート（1年間）

学籍番号： _____ 学年： _____ 氏名： _____ アーケル名： _____ ポジション（種目）： _____

大学4年間の目標

<p>4年間の目標を達成するための、今年度の目標（具体的に、左欄の目標を達成するための目標を記入してください。）</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <th style="width: 30%;">アーケル活動</th> <th style="width: 30%;">前期</th> <th style="width: 40%;">後期</th> </tr> <tr> <td> <p>具体的に、チーム・個人の競技成績など目標を記入してください。</p> <p>チーム目標 _____</p> <p>個人目標 _____</p> </td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td> <p>学業</p> <p>具体的に、GPA以上、出席率〇%以上、取得したい資格及び進路などを記入してください。</p> </td> <td></td> <td></td> </tr> </table>	アーケル活動	前期	後期	<p>具体的に、チーム・個人の競技成績など目標を記入してください。</p> <p>チーム目標 _____</p> <p>個人目標 _____</p>			<p>学業</p> <p>具体的に、GPA以上、出席率〇%以上、取得したい資格及び進路などを記入してください。</p>			<p>4年間の目標を達成するための、今年度の目標（具体的に、左欄の目標を達成するための目標を記入してください。）</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <th style="width: 30%;">アーケル活動</th> <th style="width: 30%;">前期</th> <th style="width: 40%;">後期</th> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td> <p>学業</p> </td> <td></td> <td></td> </tr> </table>	アーケル活動	前期	後期				<p>学業</p>		
アーケル活動	前期	後期																	
<p>具体的に、チーム・個人の競技成績など目標を記入してください。</p> <p>チーム目標 _____</p> <p>個人目標 _____</p>																			
<p>学業</p> <p>具体的に、GPA以上、出席率〇%以上、取得したい資格及び進路などを記入してください。</p>																			
アーケル活動	前期	後期																	
<p>学業</p>																			

100%		大学生活の充実度																	
50%																			
0%																			
前期・後半	前期	4月	後半	前期	5月	後半	前期	6月	後半	前期	7月	後半	前期	8月	後半	前期	9月	後半	
月の前半の振り返り及び後半に向けた改善点																			
月の後半の振り返り及び来月に向けた改善点																			
特記事項 競技成績等																			
教職員コメント																			

100%		大学生活の充実度																	
50%																			
0%																			
前期・後半	前期	10月	後半	前期	11月	後半	前期	12月	後半	前期	1月	後半	前期	2月	後半	前期	3月	後半	
月の前半の振り返り及び後半に向けた改善点																			
月の後半の振り返り及び次月に向けた改善点																			
特記事項 競技成績等																			
教職員コメント																			

図1 アスリート学生修学状況確認シート（様式）

アスリート学生修学状況確認シートの項目および様式については、大学4年間での目標（チーム目標・個人目標・学業面の目標）、当該年度1年間の目標（前期と後期の競技活動における目標・前期と後期の学業面の目標）、大学生活の充実度、月毎の振り返り、特記事項、競技成績、教職員からのコメントなどの項目で構成している。なお、アスリート奨学生が少しでも記入しやすいように、図2のとおり、アスリート学生修学状況確認シートの記入例を作成して、事前にアスリート奨学生全員に対して記入方法を説明した上で、該当する項目のみを定期的な手書きにて記入させた後、アスリート奨学生が手書きにて記入した修学状況確認シートに基づき、教職員が定期的かつ継続的に面談を行うようにした。

アスリート学生修学状況確認シート（1年間）

記入例

学籍番号: ●●●●●●●● 学年: 1年 氏名: 九産 太郎 アーケル名: 硬式野球部 ポジション(種目): 内野手(三塁手)

大学4年間の目標		4年間の目標を達成するための、今年度の目標(具体的に、左欄の目標を達成するための目標を記入してください。)	
アーケル活動	具体的には、チーム・個人の競技成績など目標を記入してください。 【チーム目標】 日本一 【個人目標】 大学で活躍して、卒業後もアマチュア野球で野球を続ける。	アーケル活動	前期 全体練習だけでなく、積極的に自主練習を行い、Aチームに定着し、公式戦に5試合出場する。 後期 長所を伸ばすだけでなく、短所の克服に向けた練習を心がけ、レギュラー選手になり、公式戦試合に出場する。
学業	具体的には、GPA以上、出席率〇%以上、取得したい資格及び進路などを記入してください。 GPA2.3以上、出席率80%以上、社会人野球もしくは、プロ野球で野球を続ける。	学業	授業に出席し、予習、復習をできる限り行い、大学の授業の雰囲気になれる。4年後の目標を常にクリアしておく。 単位を取るだけの勉強ではなく、理解するための勉強をする。

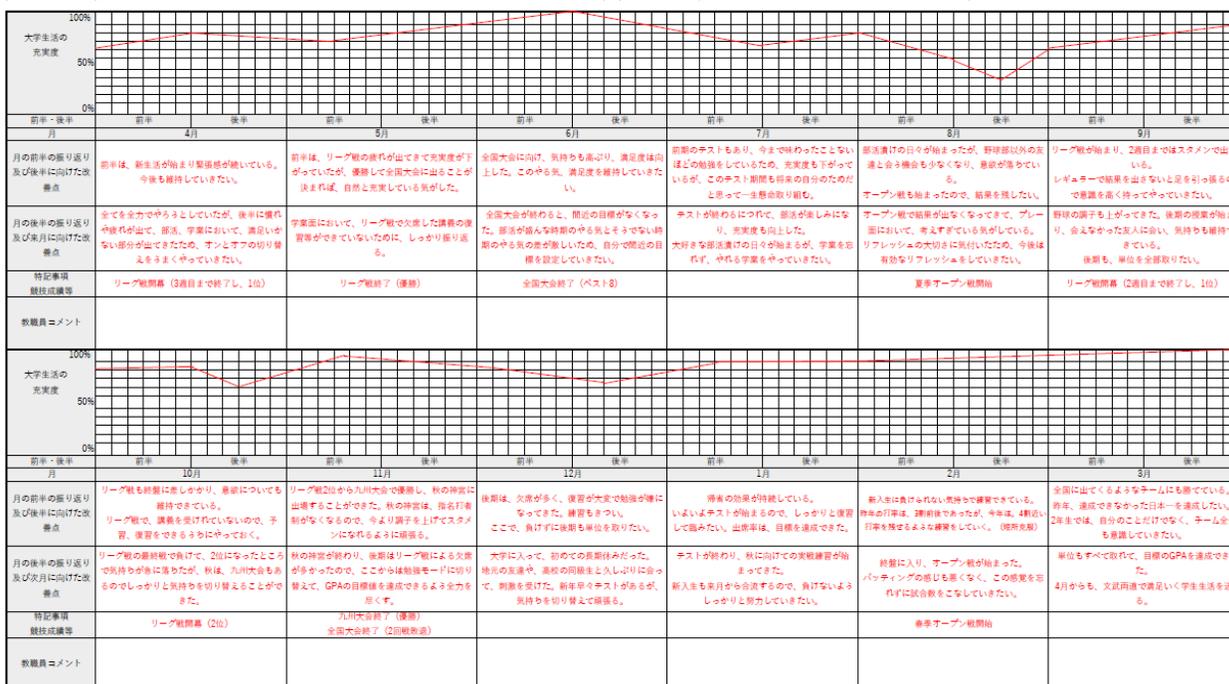


図2 アスリート奨学生修学状況確認シート(記入例)

その結果、2020年度1年次および2年次アスリート奨学生の修学状況は、次のとおりである。

表7 2020年度の1年次アスリート奨学生の修学状況

2020年度						
1年次						
人数	31単位以上	30単位以下	成績基準達成率	平均出席率	平均修得単位数	GPAの平均
21	21	0	100.0%	92.40%	42.9	2.678

2020年度の1年次アスリート奨学生は、全体で21名である。この21名に対して、継続指導・支援を行った結果、表7のとおり、21名全員が1年次終了時の修得単位数の基準である31単位以上を修得した。平均修得単位数が42.9単位、GPAの平均が2.678であるなど、修学状況が良好と言える状況になった2019年度1年次のアスリート奨学生よりも、2020年度の1年次アスリート奨学生の方が、さらに修学状況が良好になったと言える。

表 8 2020 年度の 2 年次アスリート奨学生の修学状況

2020年度						
2年次						
人数	63単位以上	62単位以下	成績基準達成率	平均出席率	平均修得単位数	GPAの平均
18	18	0	100.0%	85.4%	81.6	2.277

2020 年度の 2 年次アスリート奨学生は、全体で 18 名である。この 18 名に対して、継続指導・支援を行った結果、表 8 のとおり、18 名全員が 2 年次終了時の修得単位数の基準である 62 単位以上を修得した。平均修得単位数が 81.6 単位、GPA の平均が 2.277 であるなど、2020 年度の 2 年次アスリート奨学生の修学状況が良好であると言える。

アスリート奨学生の修得単位数や GPA などの修学状況は良好な結果になってきた一方で、アスリート奨学生の修学状況確認シートを用紙（紙媒体）での運用としていたため、アスリート奨学生が修学状況確認シートを管理していることもあり、面談の際にアスリート奨学生が修学状況確認シートを持参しない（忘れてくる）ケースや修学状況確認シートを紛失するケース、修学状況確認シートに未記入のまま持参するケースなど、効率的・効果的な運用であったとは言い難い状況であった。

加えて、面談する教職員が事前にアスリート奨学生修学状況確認シートを把握することや面談する教職員が他の教職員（内容に応じて関係部署）と事前に必要な情報を共有や相談も出来ない状況であった。さらに、2020 年度はコロナ禍であり、用紙（紙媒体）での管理は、オンライン面談や教職員との共有、適切な面談指導・支援という点においても課題があり、教職員 4 名で対応していたことから、マンパワーにも限界があり、効率的・効果的な面談指導・支援を継続的に行うためにも、アスリート奨学生修学状況確認シートのシステム化について意見が多数あり、継続的に検討することが必要であった。

4.3 アスリート学生に学業充実のための修学状況確認システム開発

先述したように、アスリート学生修学状況確認システムの導入の必要性については、継続的に議論を重ねてきた。アスリート学生修学状況確認シート（手書きにて記入する様式）を導入した初年度の 2020 年度 1 年次および 2 年次のアスリート奨学生の修学状況が良好であったこと、およびアスリート奨学生や面談する教職員に対する効果的・効率的な視点に加えて、アスリート奨学生のみならず、総合型選抜スポーツ型のアスリート学生などにも拡大して面談指導・支援を行うことができるようにする必要があったことから、「アスリート学生修学状況確認システム」の開発について、CNC（総合情報基盤センター）研究開発申請を行った結果、2021 年度の 1 年間で採択された。

このシステムは、アスリート学生における「学業と競技の両立」を効率的・効果的に支援するツールとして使用している。従前は紙媒体で運用していたが、大量の修学状況確認シート（紙）を管理した上、アスリート学生毎の入力内容の確認および指導支援を行うにあたって、その効果を高めつつ、より効率的な運用が必要となっていた。

図 3 のとおり、面談する教職員が修学状況確認シートの記入内容をいつでも確認できること、および

表 9 2021 年度の 1 年次アスリート奨学生の修学状況

2021年度						
1年次						
人数	31単位以上	30単位以下	成績基準達成率	平均出席率	平均修得単位数	GPAの平均
20	20	0	100.0%	87.1%	40.9	2.306

アスリート学生修学状況確認システム導入後の 2021 年度の 1 年次アスリート奨学生は、全体で 20 名である。この 20 名に対して、継続的に面談（修学）指導・支援を行った結果、表 9 のとおり、20 名全員が 1 年次終了時の修得単位数の基準である 31 単位以上を修得した。平均修得単位数は 40.9 単位であり、1 年次生全体の平均修得単位（38.6 単位）と比較しても高い状況になった。

表 10 2021 年度の 2 年次アスリート奨学生の修学状況

2021年度						
2年次						
人数	63単位以上	62単位以下	成績基準達成率	平均出席率	平均修得単位数	GPAの平均
21	21	0	100.0%	84.8%	84.5	2.467

また、2021 年度の 2 年次アスリート奨学生は、全体で 21 名である。この 21 名に対して、継続的に面談（修学）指導・支援を行った結果、表 10 のとおり、21 名全員が 2 年次終了時の修得単位数の基準である 62 単位以上を修得した。平均修得単位数は 84.5 単位であり、1 年次生全体の平均修得単位（74.0 単位）と比較しても高い状況になった。

2020 年度の前学期から、アスリート学生修学状況進捗確認シートを紙媒体で開発し、まずはアスリート奨学生に導入した結果、履修登録単位数の上限（CAP）が 4 単位減少したにもかかわらず、各年度の 1 年次および 2 年次のアスリート奨学生の平均修得単位数と GPA が良好であるなど、一定の成果が確認された。

その後、2021 年度からは、アスリート学生修学状況確認システムを導入したことによって、学業と競技における目標設定や競技活動の状況、学修理解度などを可視化することができるようになったことに伴い、学業と競技、それ以外の状況もリアルタイムで共有することが可能となったため、効率的・効果的な運用が可能となった。これは、アスリート奨学生に対する継続的な修学（面談）指導・支援において確認する「学業」と「競技」の両面に関する情報をシステム上に集約した汎用性の高いツールとしてシステム化したことによって、時間や場所等を選ばず、容易に入力・確認ができることになった。加えて、紙から WEB への移行によるペーパーレス化や入力負担の軽減など、学生の操作性や利便性の向上に繋がっている。継続的に修学（面談）指導・支援する側である教職員も、アスリート奨学生が入力した修学状況確認システムから、時間や場所等を選ばず、容易に確認できる状況であり、コメントの入力も容

易であるため、以前に比べて効率的な面談指導・支援ができるようになってきている。

しかしながら、この支援ツールは、独自のシステムであることから、アスリート奨学生に対する支援を行う上で改良すべき事項を適時反映できる高い利便性がある一方、学生教育支援・事務情報システム（K'sLife）とのデータ自動連携が図られていないことから、アスリート奨学生本人に関する様々な情報（リアルタイムな学業成績や授業出欠状況）を別途情報出力（紙媒体）の上、システムと併用して確認する必要があり、面談者（教職員）の負担が大きいことが運用上の課題として浮き彫りになった。また、継続的な修学（面談）指導・支援を担当する教職員も2名しかいない状況であったため、1年次および2年次のアスリート奨学生に注力して指導・支援を行い、3年次および4年次のアスリート奨学生への指導・支援は、1年次および2年次に比較して短時間になっていた。

5 アスリート学生修学状況確認システムのカスタマイズ

アスリート学生修学状況確認システムの運用上の課題として浮き彫りになった事項を改善（カスタマイズ）するために、2021年度の総合情報基盤センター（CNC）研究開発において、1年次および2年次のアスリート奨学生に対する継続的な修学（面談）指導・支援時間の確保および3年次と4年次のアスリート奨学生に対する継続的な修学（面談）指導・支援時間を増加させ、アスリート奨学生が学業不振に陥らないようにすることや学業と競技を両立できるように指導・支援するため、重要な指標となる「出席率」および「学業成績」に関する情報を、本システムにインポート（CSV形式）可能な新機能を実装した。

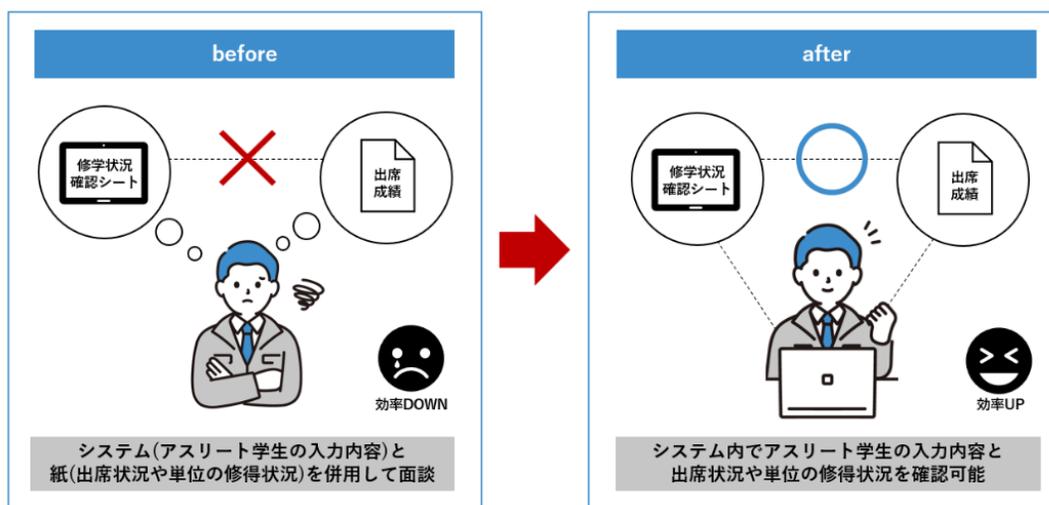


図4 アスリート学生修学状況確認シートにおける現状の課題と対応イメージ

今般のシステム改修では、図4のとおり、アスリート学生が学業不振に陥らないための重要な指標となる「出席率」および「学業成績」に関する情報をCSV形式のデータ取込みにより、システム上に表示することを実現した。なお、取込みデータ作成に関する工数削減を目的に、図5のとおり、対象者のユーザIDおよび学籍番号を出力可能な仕様とし、ダウンロードしたCSV形式のデータに必要な情報（出席率・修得単位数）を追加したデータを取込むことによって表示可能となった。

アスリート学生修学状況確認シート

各検索条件を入力・選択して下さい。
学生一覧が表示されたら、入力画面へをクリックしてください。

学籍番号 氏名 所属サークル 全て 学年 全て 年度 [2024]

1 月 前半 選択されていません

- 1 List.csvをDLし、必要な情報を追加
- 2 追加する月・週を指定してファイルを選択
- 3 CSV取込

A	B	C	D
1	ID	学籍番号	出席率
2	k21c	21C	80
3	k21c	21C	84
4	k21c	21C	90
5	k21c	21C	100
6	k21c	21C	91
7	k21d	21C	82
8	k21e	21E	73
9	k21e	21E	95
10	k21e	21E	100
11	k21h	21H	94
12	k21h	21H	81
13	k21h	21H	85
14	k21h	21H	89
15	k21h	21H	79
16	k21h	21H	99
17	k22c	22C	74
18	k22c	22C	91
19	k22c	22C	90

図5 アスリート学生修学状況確認シートへのデータ取込に関する手順

上述の改修によって、図6のとおり、システム内に必要な情報が表示されていることによって、複数のシステムや紙を往復した必要情報の参照等が省略されたことから、面談者のみならず、入力するアスリート奨学生の利便性向上にも繋がっている。

学籍番号 学年 所属サークル 所属サークル (検索)

4年度までの情報
5年度までの情報

サークル活動
チーム情報
個人情報

出席率
修得単位数
データ取り込み日

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月
出席率	82%	86%	95%			
修得単位数	114単位	114単位	114単位			
データ取り込み日	2024.04.08	2024.04.15	2024.04.19			

大学の授業実況

月の前半の振り分け比率
月の後半の振り分け比率

特記事項
特記事項

職員コメント

図6 アスリート学生修学状況確認シート表示画面

6 アスリート奨学生への修学状況確認システム導入およびカスタマイズ後の修学状況

先述したように、アスリート学生の修学状況確認シートの開発、修学状況確認システムの導入、修学状況確認システムのカスタマイズと教職員による継続的な面談（修学）指導・支援を行った結果、表 11 のとおり、1 年次および 2 年次のアスリート奨学生の平均修得単位数など、修学状況に一定の成果があったと言える。なお、成績基準以下が年度によって数名いるが、以前のように 20 単位未満が数人いるといった状況ではなく、次年度の学修状況では十分にアスリート奨学生への再認定や卒業も可能な状況である。

表 11 2019 年度から 2023 年度の 1 年次および 2 年次アスリート奨学生の修学状況

年次	1 年次				2 年次			
	人数	成績基準以下	平均修得単位数	GPA の平均	人数	成績基準以下	平均修得単位数	GPA の平均
2019 年度	19	1	42.8	2.256	13	1	79.2	2.136
2020 年度	21	0	42.9	2.678	18	0	81.6	2.277
2021 年度	20	0	40.9	2.306	21	0	84.5	2.467
2022 年度	19	2	39.9	2.073	20	3	76.3	2.145
2023 年度	25	3	38.7	2.204	16	0	79.9	2.129

7 調査・分析の概要

本調査では、アスリート学生がアンケート調査において、「修学状況を向上（改善）させるために必要な施策」について記載した自由記述に着目し、計量テキスト分析を用いて収集したテキストデータを分析することによって、アスリート学生が学業と競技を両立するために効果的な支援策について可視化することを試みる。

アスリート学生が修学状況を向上（改善）させるために必要な施策について、自由記述に記載されたテキストデータを分析することにより、アスリート奨学生の修得単位数や GPA といった学業面に関する数値データによる結果だけでなく、アスリート奨学生が必要としている施策やアスリート奨学生以外のアスリート学生が必要としている施策との比較、すなわち、アスリート学生が必要としている施策についても検討することが可能となる。

テキストデータの分析手法はさまざまであるが、近年では計量テキスト分析という方法が注目されている。計量テキスト分析とは、計量的分析手法を用いてテキストデータを整理または分析する方法である^[22]と定義されている。テキストデータを品詞単位の単語に分解し、語の出現頻度や関係性について統計的手法を用いて解析することでデータの特徴や傾向を知ることができる。

なお、今回のテキストデータの分析には、社会学・社会調査の分野で活用することを目的に樋口（2014）により開発された計量テキスト分析用フリーソフトウェアである「KH Coder 3」を使用した。

7.1 調査対象および調査内容

本稿で分析に用いた分析対象のデータは、2024年10月11日11時00分から10月20日17時00分の間に、本学の体育会系サークル（運動部）である「硬式野球部（部員数116名）」、「サッカー部（部員数90名）」、「空手道部（部員数34名）」、「準硬式野球部（部員数56名）」、「バスケットボール部（部員数66名）」、「ラグビー部（部員数43名）」、「ソフトボール部（部員数34名）」、「弓道部（部員数59名）」、「陸上競技部（部員数51名）」、「ソフトテニス部（部員数25名）」、「卓球部（部員数19名）」、「水泳部（フィンスイミング）（部員数31名）」、「アメリカンフットボール部（部員数9名）」、「アイスホッケー部（部員数23名）」、「アーチェリー部（部員数20名）」に所属するアスリート学生1年次から4年次の合計676名を対象に行った「アスリート学生の学業と競技の両立に関するアンケート調査」によって得られた。

アンケートに回答したアスリート学生数は、409名（回収率60.5%）であった。回答者の学年の内訳は、1年次生148名（36.2%）、2年次生99名（24.2%）、3年次生94名（23.0%）、4年次生68名（16.6%）であった。アンケートに回答したアスリート学生の入試区分の内訳は、総合型選抜スポーツ型が175名（42.8%）、総合型選抜課題解決型が13名（3.2%）、総合型選抜育成型が11名（2.7%）、指定校推薦が78名（19.1%）、付属校推薦が15名（3.7%）、公募制推薦が33名（8.8%）、一般前期が50名（12.2%）、一般後期が10名（2.4%）、一般・大学入学共通テスト併用型が10名（2.4%）、大学入学共通テスト利用が10名（2.4%）、その他が4名（1.0%）であった。

アンケート調査の主な項目は、「性別」、「所属している体育会系サークル名（運動部）」、「学年」、「入試区分」、「アスリート奨学生であるか否か」、「当該サークル（運動部）の指導者の有無」、「大学入学後の競技成績」、「正選手であるか否か」、「修学状況が良好であるか否か」、「修学状況を向上（改善）させるために必要な施策」であった。これらの質問のうち、本稿では、アスリート学生が「修学状況を向上（改善）させるために必要な施策」について記載された自由記述305件を対象に分析した。

7.2 分析の手順および分析の方法

分析のツールは、先述したように「KH Coder 3」を使用した。この「KH Coder 3」は、自由記述のような通常の文章からなるテキストデータを品詞別に分解し、語の出現頻度や関係性について統計的手法を用いて解析することでデータの特徴や傾向を可視化することが可能である^[23]。

テキストデータに関しては、アンケート調査に回答されたアスリート学生409名が記載した「修学状況を向上（改善）させるために必要な施策」に関する自由記述内容を抽出した。

また、アスリート学生の区分として、①アスリート奨学生、②総合型選抜スポーツ型のアスリート学生、③その他のアスリート学生の3群を外部変数として設定した。

続いて、計量テキスト分析の際に用いるテキストデータの前処理として、同じ意味を持つ語である「修学状況確認シート」と「ポートフォリオ」の表記について、以前は「アスリート学生ポートフォリオ」との呼称であったが、現在は「アスリート学生修学状況確認シート」に名称を変更しているため、「修学状

況確認シート」という表現に統一した。

最初に、テキストデータを品詞別および出現回数が多かった順に語を抽出し、頻出語リストを確認した。次に、階層的クラスター分析を行い、デンドログラムを作成し、出現パターンの似通った語の組み合わせを可視化した。そして、テキストデータにおける頻出語同士の共起関係を確認するために、共起ネットワーク分析を行った。なお、共起ネットワークでは、頻出語の出現回数が強い共起関係ほど太い線で、出現数の多い語ほど大きい円で描画される。また、アスリート奨学生、総合型選抜スポーツ型のアスリート学生、その他のアスリート学生の3群を外部変数とした共起ネットワーク分析を行い、区分による違いを分析した。最後に、クロス集計結果を可視化するために対応分析を行った。なお、クロス集計には、外部変数であるアスリート奨学生、総合型選抜スポーツ型のアスリート学生、その他のアスリート学生の3群を用いて、修学状況を向上(改善)させるための施策に関する自由記述の特徴を可視化した。

8 調査・分析の結果

8.1 語の抽出

アスリート学生の学業と競技の両立に関するアンケート調査に回答された409名のうち、アスリート学生が「修学状況を向上(改善)させるために必要な施策」について記載された305件の自由記述データを分析対象とし、計量テキスト分析の具体的な検討内容については、先行研究^[24, 25, 26, 27]に準じて行い、KH Coderを用いて前処理を実行した上で、単純集計を行った結果、83の段落、83の文が確認された。また、総抽出語数(分析対象ファイルに含まれているすべての語の延べ数)は1,030、異なり語数(何種類の語が含まれていたかを示す数)は190であった。これらの頻出語の出現回数が2回以上のものを表12に示した。

出現回数からみると、「確認」が最も多い38回であり、「教職員」が35回、「状況」が31回、「修学」が29回、「シート」が28回、「面談」が23回、「出席」が17回、「思う」が15回、「授業」が11回と続いた。その他、「チェック」、「指導」、「定期」、「書く」、「入力」、「時間」、「振り返る」、「大学」、「休む」、「支援」、「必要」などの語が出現した。最も多い出現回数であった「確認」の詳細をみると、「定期的に修学状況確認シートへの入力と確認」、「定期的に修学状況確認シートを書くことで振り返りをしっかりすることと教職員による定期的な確認」、「修学状況確認シートによる目標の振り返りと出席簿」などの記述があった。また、2番目に多い出現回数であった「教職員」の詳細をみると、「教職員との面談」、「教職員が課題のチェック」、「定期的な教職員との面談」、「教職員との面談と外部指導者との連携」などの記述があった。アスリート学生は、定期的に修学状況確認シートに記入(入力)すること、定期的に教職員との面談や教職員からのチェックについての言及が多いことが分かる。

表 12 アスリート学生の自由記述における抽出語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
確認	38	テスト	5	サークル	2
教職員	35	課題	5	援助	2
状況	31	学生	5	確保	2
修学	29	自覚	5	学業	2
シート	28	自分	5	記入	2
面談	23	取り組む	5	公	2
出席	17	場合	5	欠席	2
思う	15	レポート	4	現在	2
授業	11	管理	4	欠	2
チェック	10	公式	4	向上	2
指導	10	前	4	考える	2
定期	10	勉強	4	行動	2
書く	9	目標	4	取り組み	2
入力	8	練習	4	重なる	2
時間	7	扱い	3	重要	2
振り返る	7	持つ	3	出来る	2
大学	7	情報	3	増額	2
休む	6	単位	3	低い	2
支援	6	部活	3	登録	2
必要	6	履修	3	復習	2

8.2 階層的クラスター分析

語の組み合わせの類似度や距離に基づいて、似ている語と似ている語の関係を詳解するために階層的クラスター分析（最小出現数 2, 方法 Ward 法, 距離 Jaccard）を行い、デンドログラムを図 7 のとおり作成したところ、8 種類のクラスターに分かれた。

クラスター 1 は、「確認」、「状況」、「修学」、「シート」、「定期」、「入力」、「書く」、「振り返る」の 8 語で構成され、定期的に修学状況確認シートを記入（入力）して振り返ることの重要性が可視化された。クラスター 2 は、「公式」、「休む」、「授業」、「場合」、「支援」、「資料」、「渡す」の 6 語で構成され、公式戦があって授業を休む場合は資料を渡すなどの支援の重要性が可視化された。クラスター 3 は、「テスト」、「前」、「確保」、「勉強」、「時間」、「練習」の 6 語で構成され、定期試験前は練習よりも勉強時間を確保することの重要性が可視化された。クラスター 4 は、「自分」、「自覚」、「取り組む」、「持つ」、「思う」の 5 語で構成され、自分で自覚を持って取り組むことの重要性が可視化された。クラスター 5 は、「単位」、「修得」、「少ない」、「学業」、「扱い」、「出来る」、「ペナルティ」、「決める」、「部活」、「必要」の 10 語で構成され、学業を疎かにして修得単位数が低い場合は、体育会系サークル（運動部）内においてペナルティを決めることの必要性が可視化された。クラスター 6 は、「援助」、「増額」、「サークル」の 3 語で構成され、公式戦や合宿などで経済的負担が必要であることからアルバイトをして遠征費等を捻出しているため、体育会系サークル（運動部）に対する援助金を増額することの必要性が可視化された。クラスター 7 では、「教職員」、「面談」、「課題」、「レポート」、「チェック」、「重要」、「低い」、「学生」、「措置」、「出席」、「管理」、「情報」、「欠席」、「増加」、「理解」の 17 語で

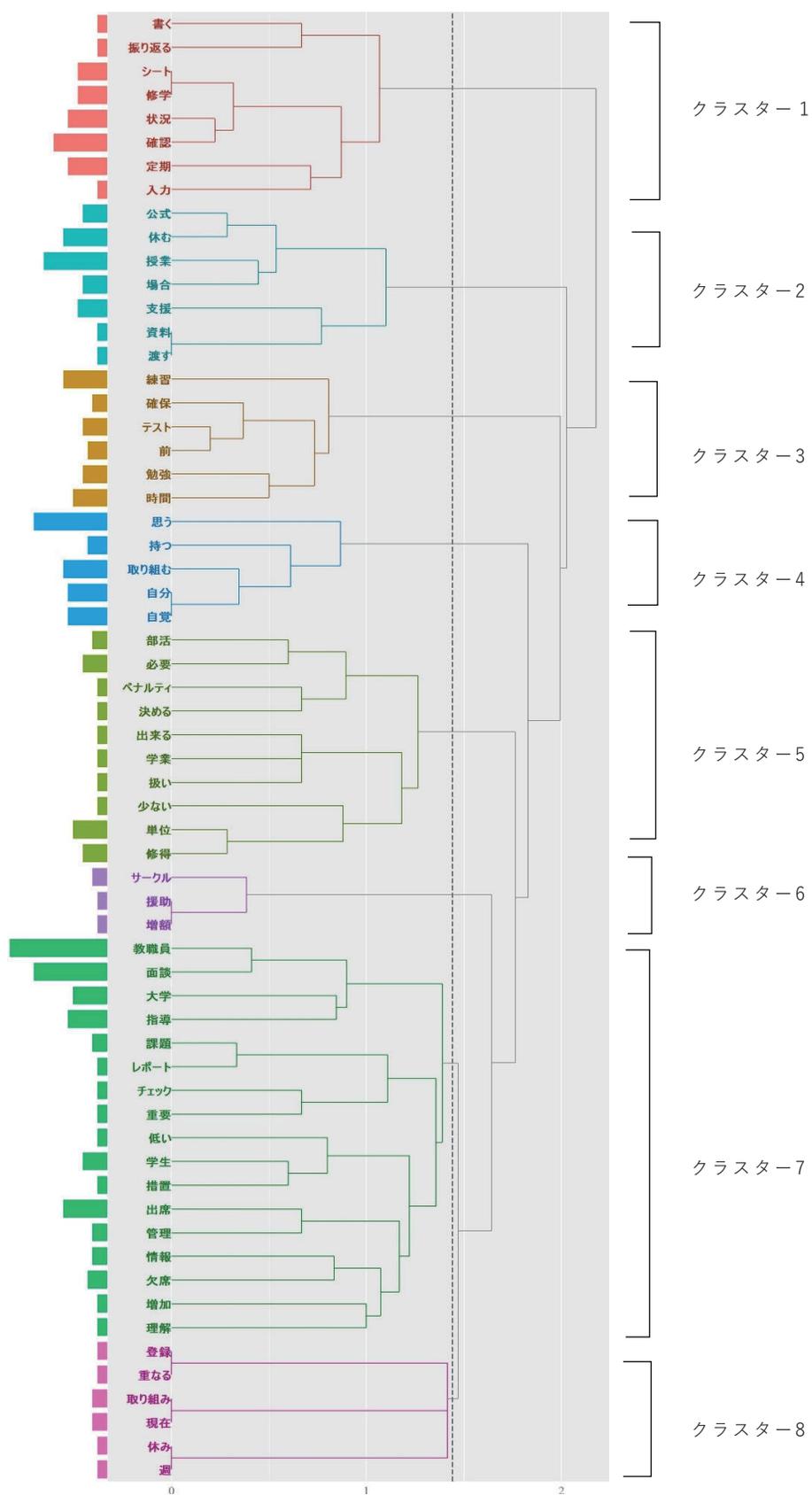


図7 「修学状況を向上(改善)させるために必要な施策」の抽出語における階層的クラスター分析によるデンドログラム

構成され、定期的かつ継続的に、教職員がレポートや課題、出席率、欠席理由などを確認した上で面談指導・支援を行うことの重要性が可視化された。クラスター 8 では、「登録」、「重なる」、「現在」、「取り組み」、「休み」、「週」の 6 語で構成され、学期前の履修登録の際に公式戦や練習試合といった課外活動と重なる場合があるため、柔軟な履修登録の仕組みについて検討が必要であることが可視化された。

8.3 共起ネットワーク

アスリート学生が「修学状況を向上(改善)させるために必要なこと」の自由記述におけるテキストデータにおいて、出現回数 2 回以上の語に対して、図 8 のとおり、共起ネットワークを作成した。共起ネットワークは、出現頻度の高い語の円ほど大きく、共起関係の強い語ほど太い線で結ばれており、近くに付置されている。円の色の濃さは各語がその他の語と多くの共起関係を結び、中心的な語として出現したかどうかを表している。色が濃いほど、中心的な語と言える。以下、適宜自由記述を参照しながら、共起ネットワークから示唆されることをまとめる。

まず注目すべきは、図 8 の右下に大きな円で描かれた「教職員」、「面談」と図 8 のやや右側の上部に円で描かれた「定期」、「状況」、「修学」、「確認」、「シート」、「入力」、「書く」、「振り返る」の共起関係である。図 7 の結果と併せて考えると、アスリート学生は、定期的に修学状況確認シートに入力(記載)して振り返ることと教職員との面談が修学状況を向上(改善)させるために必要な施策であることを示している。次に、図 8 のやや左側の下部に大きな円で描かれた「授業」、「休む」、「公式」、「場合」、「資料」、「渡す」、「支援」が共起しており、公式戦があつてやむを得ず授業を休む場合は、資料を渡すなどの支援の必要性の訴えが見られる。また、図 8 の左側中央部の円で描かれた「自分」、「自覚」、「持つ」、「取り組む」が共起しており、修学状況を向上(改善)させるために必要な施策は自分自身が自覚を持って取り組むことが重要であると示されている。

図 8 の左端の中程の共起ネットワークでは、「テスト」、「前」は、「練習」時間を減らして、「勉強」時間を「確保」することの重要性が挙げられている。そして、右端の中程より少し上部に、「出席」、「管理」が共起しており、これは出席管理の重要性が示されている。その他にも、履修登録が課外活動時間と重複しないようにすることや公式戦に関する旅費や合宿費用を工面するためにアルバイトをしているため、経済的支援の充実の観点から体育会系サークル(運動部)に対する援助金の増額の必要性、低修得単位に陥ったアスリート学生にはペナルティを与えることなども可視化された。

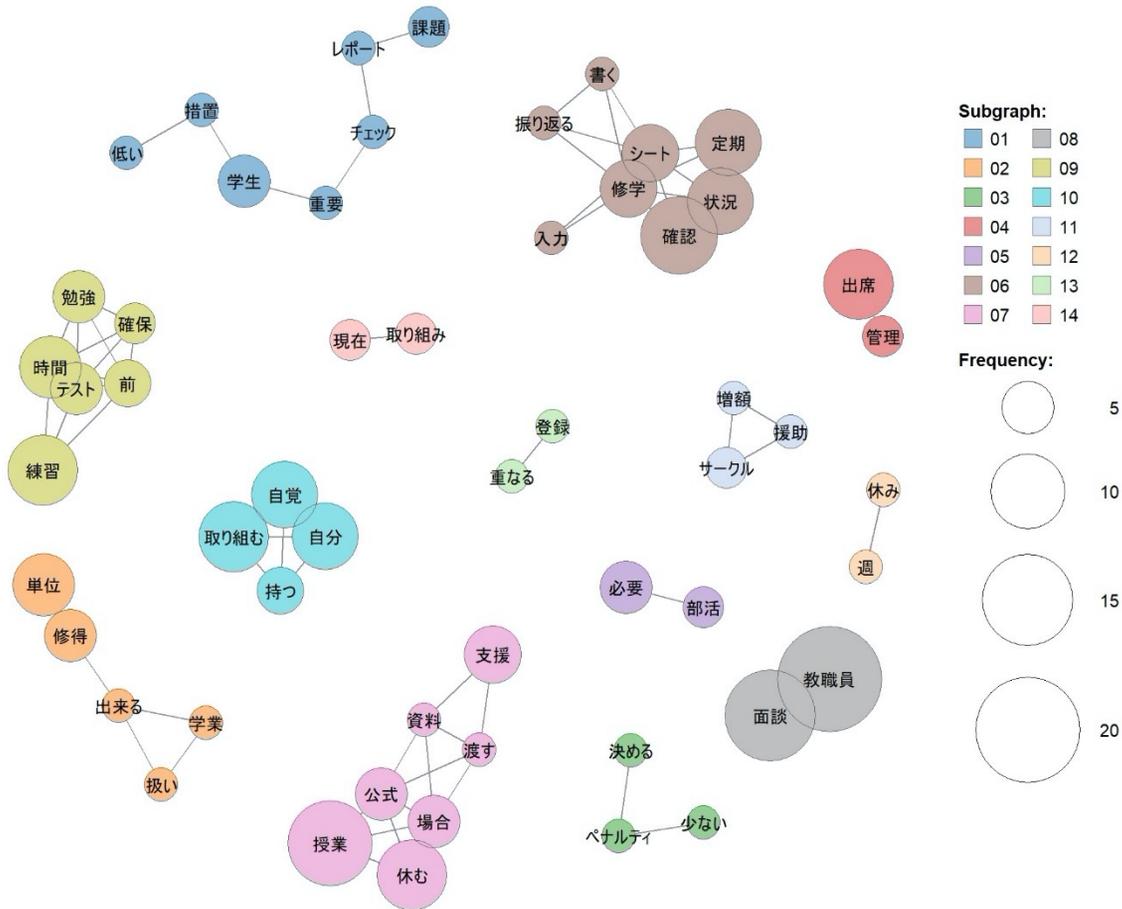


図8 「修学状況を向上(改善)させるために必要な施策」における共起ネットワーク

以上のことから、アスリート学生にとって修学状況を向上(改善)させるために必要な施策としては、「教職員との定期的かつ継続的な面談」、「定期的に修学状況確認シートに入力して振り返る」、「公式戦があってやむを得ず授業を欠席する際は、公欠扱いにすることと資料を渡すなどの支援」、「自分自身が自覚を持って取り組むこと」、「定期試験前は活動時間を短縮して勉強時間を確保する」、「公式戦に関する旅費や合宿費用を工面するために体育会系サークル(運動部)への援助金の増額」、「低修得単位に陥ったアスリート学生にはペナルティを与える」など、多面的な施策を展開することが重要であることが示唆される。

しては、大学側が出席状況を確認した上で、単位が修得できるように面談指導・支援を行うことが必要であることに加えて、公式戦があって授業を欠席する場合は、公欠扱いにするなどの支援が必要であることが示唆された。その他のアスリート学生の特徴としては、大学側が出席状況を確認した上で、単位が修得できるように面談指導・支援を行うことが必要であることに加えて、自己管理を行い、自分自身が自覚を持って取り組むことの重要性が示された。最後に、共通して言えることは、教職員の継続的な面談（修学）指導・支援といった大学側である教職員の関わりが重要であることが示唆される。

8.4 対応分析

アスリート学生が「修学状況を向上（改善）させるために必要なこと」について記載した自由記述の傾向を、図10のとおり、アスリート奨学生、総合型選抜スポーツ型のアスリート学生、その他のアスリート学生を外部変数とした対応分析を行った。

図10に示した結果では、原点0,0に近い語は標準的な語であり、原点から離れているほど区分ごとに特徴的な語であると捉えることができる。

まず、各区分の位置であるが、その他のアスリート学生が最も原点に近く、次に総合型選抜スポーツ型のアスリート学生が原点に近く、アスリート奨学生が最も原点から遠く特徴的であることが可視化された。

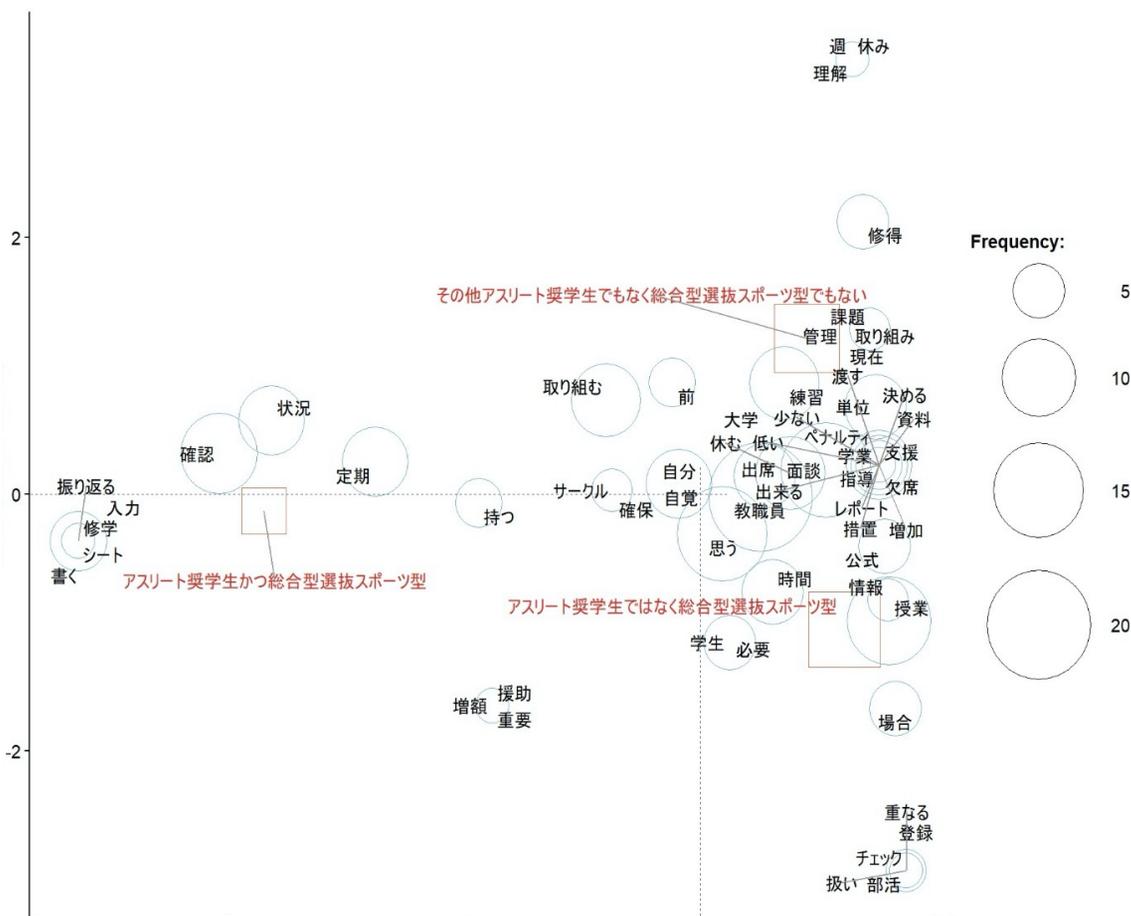


図10 「修学状況を向上（改善）させるために必要な施策」における対応分析

次に、各区分における特徴を確認する。アスリート奨学生については、修学状況確認シートに入力（記載）し、定期的に状況を確認した上で、日々の活動を振り返ることの重要性が示された。総合型選抜スポーツ型のアスリート学生については、公式戦などでやむを得ず授業を休む場合は、課題やレポートの措置を適用するなどの支援の重要性や履修登録期間と課外活動時間が重複する場合の配慮をすることが重要であると捉えていることが可視化された。その他のアスリート学生については、自分で自覚して取り組むことや低修得単位の者にペナルティを与えることが修学状況向上に必要なだと捉えていることが示唆された。

この結果から、各区分によって捉え方の違いが明らかになり、多面的に施策を展開することの重要性および自由記述におけるテキストデータを通じた区分別の対応分析の有効性が示唆された。

9. 考察まとめと今後の課題

本稿では、アスリート学生がアンケート調査において、「修学状況を向上（改善）させるために必要な施策」について記載した自由記述に着目し、計量テキスト分析を用いて収集したテキストデータを分析することによって、アスリート学生が学業と競技を両立するために効果的な支援策について可視化することを試みた。計量テキスト分析には、アスリート学生が記述した自由記述をテキストデータにして、形態素解析による分析と視覚化が可能なフリーソフトウェアである「KH Coder 3」を用いた。名詞、動詞、形容詞の3つの品詞を分析の対象とし、各品詞別に出現回数が高かった語を抽出したのち、階層的クラスター分析、共起ネットワークと対応分析を行った。

アンケートに回答したアスリート学生数は、409名（回収率 60.5%）であり、アスリート学生が「修学状況を向上（改善）させるために必要な施策」について記載された自由記述 305 件をテキストデータとして抽出して分析した。

また、アスリート学生の区分として、①アスリート奨学生、②総合型選抜スポーツ型のアスリート学生、③その他のアスリート学生の3群を外部変数として設定した。

続いて、計量テキスト分析の際に用いるテキストデータの前処理として、同じ意味を持つ語である「修学状況確認シート」と「ポートフォリオ」の表記について、以前は「アスリート学生ポートフォリオ」との呼称であったが、現在は「アスリート学生修学状況確認シート」に名称を変更しているため、「修学状況確認シート」という表現に統一した。

共起ネットワークでは、アスリート学生にとって修学状況を向上（改善）させるために必要な施策として、「教職員との定期的かつ継続的な面談」、「定期的に修学状況確認シートに入力して振り返る」、「公式戦があってやむを得ず授業を欠席する際は、公欠扱いにすることと資料を渡すなどの支援」、「自分自身が自覚を持って取り組むこと」、「定期試験前は活動時間を短縮して勉強時間を確保する」、「公式戦に関する旅費や合宿費用を工面するために体育会系サークル（運動部）への援助金の増額」、「低修得単位の陥ったアスリート学生にはペナルティを与える」など、多面的な施策を展開することが重要であることが示唆された。

アスリート奨学生、総合型選抜スポーツ型のアスリート学生、その他のアスリート学生に分類し、それを外部変数として、それぞれに関連する特徴的な要素や傾向を共起ネットワークで示した結果、アスリート奨学生の特徴としては、定期的に修学状況確認シートに入力（記載）して振り返ることが重要であることが示唆された。総合型選抜スポーツ型のアスリート学生の特徴としては、大学側が出席状況を確認した上で、単位が修得できるように面談指導・支援を行うことが必要であることに加えて、公式戦があつて授業を欠席する場合は、公欠扱いにするなどの支援が必要であることが示唆された。その他のアスリート学生の特徴としては、大学側が出席状況を確認した上で、単位が修得できるように面談指導・支援を行うことが必要であることに加えて、自己管理を行い、自分自身が自覚を持って取り組むことの重要性が示された。最後に、アスリート学生全体に共通して言えることは、教職員の継続的な面談（修学）指導・支援といった大学側である教職員の関わりが重要であることが示唆された。

加えて、対応分析の結果、アスリート奨学生については、修学状況確認シートに入力（記載）し、定期的に状況を確認した上で、日々の活動を振り返ることの重要性が示された。総合型選抜スポーツ型のアスリート学生については、公式戦などでやむを得ず授業を休む場合は、課題やレポートの措置を適用するなどの支援の重要性や履修登録期間と課外活動時間が重複する場合の配慮をすることが重要であると捉えていることが可視化された。その他のアスリート学生については、自分で自覚して取り組むことや低修得単位の者にペナルティを与えることが修学状況向上に必要だと捉えていることが示唆された。

このことにより、アスリート奨学生は、入学直後に学業と競技の両立の重要性や目標設定ワークショップ、修学状況確認シートへの入力（記載）、定期的かつ継続的な教職員による面談（修学）指導・支援と言った一連の学生支援フローを行ってきたことが、結果として平均修得単位数や GPA といった修学状況が良好であることに繋がっていることが示唆され、自己管理能力と教職員による支援のバランスが重要なキーワードであると考えられる。続いて、総合型選抜スポーツ型のアスリート学生やその他のアスリート学生については、公式戦などでやむを得ず授業を休む場合は、課題やレポートの措置を適用するなどの支援の重要性や履修登録期間と課外活動時間が重複する場合の配慮をすること、自分で自覚して取り組むことや低修得単位の者にペナルティを与えることなどが挙げられたため、アスリート学生全体にとっては多面的な施策を継続的に展開することが重要であるだろう。しかしながら、アスリート奨学生以外のアスリート学生に対しては、修学状況確認シートや定期的かつ継続的な教職員による面談（修学）指導・支援を展開していないため、アスリート学生全体でアスリート奨学生に実施している施策を行うことができれば、アスリート学生にとって効率的・効果的な施策の一端を明らかにすることができるかもしれないが、そもそも面談指導・支援を行う教職員が2名しか配置できていないため、現時点でアスリート学生全体に修学状況確認シートや教職員との面談を導入することができないのが課題の一つであると言える。

今回は、アスリート学生の修学状況を向上（改善）させるために必要な施策に着目して検討した結果、

アスリート奨学生修学状況確認シートや修学状況確認システム、それに基づく継続的かつ定期的な教職員との面談は、アスリート奨学生の単位修得や GPA などの学業面に対して、一定の成果があったと言える。加えて、アスリート奨学生以外のアスリート学生修学状況を向上(改善)させるために必要な施策についても、一端ではあるが可視化された。また、可視化について、全体的な傾向を比較的容易に概観することができるという点では、計量テキスト分析は有効なツールであると言えるだろう。しかしながら、アスリート学生に対する修学面を担当する教職員は2名に留まっているため、今後、アスリート学生全体に多面的な施策を展開することは、現段階で困難であることから、今後の対応については慎重に検討していく必要があると言える。とはいえ、アスリート学生に対する学業と競技の両立の推進のための学生支援策については、継続的な視点で複数の施策を試行錯誤しながら展開することや各種データ分析など、改善のスパイラルを回していく必要があることは言うまでもない。人員配置も含め、教職協働をテーマとして、今後もアスリート学生の学業と競技の両立に向けて取組んでいきたい。

本稿の問題の所在およびアスリート学生の学業と競技の両立における目標設定と学業支援の重要性に関する一部分については、発表済み^[28, 29]である。

謝辞

本稿で述べたアスリート学生に対する学生支援の取組についてご協力くださった教職員の皆様に、この場をお借りして心から感謝申し上げます。

脚注

(1) アスリートという用語は、障害者やプロ選手、スポーツ愛好家など競技者全般を含めた使用へと拡大してきたと定義されている^[30]。そこで本研究では、競技レベルや種目等を限定せず、競技に取り組む人を「アスリート」としている。大学入学後に大学スポーツにおける競技活動を行っている学生の呼称は、「学生アスリート」なのか、「アスリート学生」なのかという疑問点がある。これに関しては、学生でもありアスリートでもある彼らの呼称は研究者によって表現されており、統一されていないとのことである^[31]。であれば、大学スポーツは高等教育の中に存在しているのは言うまでもないが、大学に入学しているからこそ競技活動を行うことができるため、身分は大学生であることを前提として正課教育である学業と正課外活動である競技活動があるとの認識で、本稿では「アスリート学生」と呼ぶことにする。

引用・参考文献

- [1] 「スポーツ基本法」(平成23年法律第78号)第28条, <https://laws.e-gov.go.jp/law/423AC1000000078>
(最終閲覧日:2024年12月2日)
- [2] 文部科学省, 2017, 「大学スポーツの振興に関する検討会議最終とりまとめ-大学のスポーツの

価値の向上に向けて-

https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/005_index/toushin/___icsFiles/afieldfile/2017/03/10/1383246_1_1.pdf (最終閲覧日:2024年12月2日)

- [3] 中村哲也, 2017, 「日本版 NCAA 構想の問題点と課題」『現代スポーツ評論-大学スポーツの産業化』36, pp. 53-65.
- [4] スポーツ庁, 2019, 「大学スポーツの振興に関するアンケート」
https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop09/list/detail/___icsFiles/afieldfile/2019/05/13/1416556_1.pdf (最終閲覧日:2024年12月2日)
- [5] スポーツ庁, 2018, 「大学スポーツの振興に関するアンケート」
https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop09/list/detail/___icsFiles/afieldfile/2018/05/10/1404336_001_1.pdf (最終閲覧日:2024年12月2日)
- [6] スポーツ庁, 2017, 「大学スポーツの振興に関するアンケート」
https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/005_index/shiryo/___icsFiles/afieldfile/2017/03/28/1383439_5.pdf (最終閲覧日:2024年12月2日)
- [7] 荒井弘和, 深町花子, 鈴木郁弥, 榎本恭介, 2018, 「大学生アスリートのスポーツ・ライフ・バランスに関する要因-デュアルキャリアの実現に向けて-」『スポーツ産業学研究』28-2, pp. 149-161.
- [8] 木内敦詞, 奈良雅之, 島本好平, 山口幸生, 長倉富貴, 2012, 「学生アスリートのライフスキルと学業・学習支援」『大学教育学会誌』34, pp. 77-81.
- [9] 津田忠雄, 2007, 「大学教育とスポーツ競技を通じての教育-大学生アスリートとライフスキル教育プログラムの展開-」『近畿大学健康スポーツ教育センター研究紀要』6, pp. 13-25.
- [10] 高峰修, 2010, 「体育会学生の大学・競技生活とキャリア意識に関する調査報告」『明治大学教養論集』452, pp. 23-38.
- [11] 栗木明裕, 岡村尚昌, 津田彰, 2020, 「大学生アスリートの学業不振と心理的競技能力との関連性」『筑紫女学園大学研究紀要』15, pp. 195-203.
- [12] 桜井芳雄, 『目標』, 心理学辞典, 有斐閣, 1999.
- [13] 南隆男・浦光博・角山剛・武田圭太, 『組織・職務と人間行動』, ぎょうせい, 2000. [14]Gayles, J. G., “The student athlete experience,” *New Directions for Institutional Research* 114: 33-41, 2009.
- [15] 阪田俊輔・一ノ瀬大一, 2021, 「大学運動部員の動機づけの在り方が競技状況スキル及び日常生活スキルに及ぼす影響」『九州産業大学健康・スポーツ科学研究』23, pp. 1-8.
- [16] Sauer, S., Desmond, S., and Heintzelman, M., “Beyond the playing field: The role of athletic participation in early career success,” *Personnel Review* 42: 644-661, 2013.
- [17] 多田泰紘・岩崎千晶・中澤務, 「学生アスリートに対するライティング学習支援の効果検証:学習特性に基づく支援方法の検討」, 『関西大学高等教育研究』10, pp. 183-189, 2019.
- [18] 姫野完治, 「教職志望学生の成長観の変容を支援するポートフォリオおよびカルテ・システムの

- 開発と試行」『教師学研究』11, pp. 1-11, 2012.
- [19] 岡本幸・長瀧寛之・齋藤明紀・都倉信樹・増澤利光, 「大学教育に適したポートフォリオシステム」『コンピュータと教育』68-8, pp. 55-62, 2013.
- [20] 一ノ瀬大一, 植村浩太郎, 2020, 「中退予防の効果的施策に関する研究」『大学行政管理学会誌』24, pp. 127-137.
- [21] 一ノ瀬大一, 2021, 「中退者調査から見てきた中退未然防止策の可能性」『大学行政管理学会誌』, 25, pp. 92-103.
- [22] 樋口耕一, 2014, 「社会調査のための計量テキスト分析 - 内容分析の継承と発展を目指して -」『ナカニシヤ出版: 東京』.
- [23] 牛澤賢二, 2018, 「やってみよう テキストマイニング」『朝倉書店』.
- [24] 田中雅人, 2018, 「計量テキスト分析を用いた野外活動の振り返りの分析」『愛媛大学教育学部保健体育紀要』.
- [25] 永井暁行・金子大輔, 「自宅・自室での学習環境に関する緊急調査」『北星学園大学文学部北星論集』58, pp. 43-49.
- [26] 四方田健二, 2020, 「新型コロナウイルス感染拡大に伴う不安やストレスの実態: Twitter 投稿内容の計量テキスト分析から」『体育学研究』65, pp. 757-774.
- [27] 越中康治・高田淑子・木下英俊・安藤明伸・高橋潔・田幡憲一・岡正明・石澤公明, 2017, 「テキストマイニングによる授業評価アンケートの分析: 共起ネットワークによる自由記述の可視化の試み」『宮城教育大学情報処理センター研究紀要』22, pp. 67-74.
- [28] 一ノ瀬大一, 2022, 「大学スポーツにおけるアスリート学生に関する研究動向 — 学業と競技の両立に着目して」『九州大学教育社会学研究集録』23, pp. 37-46, 2022.
- [29] 一ノ瀬大一, 百瀬俊哉, 豊田直樹, 植村浩太郎, 2022, 「アスリート学生ポートフォリオシステム導入による学生支援の一考察」『九州産業大学総合情報基盤センター COMMON』42, pp. 19-49.
- [30] 石井克, 2016, 「アスリートという用語に表出される新たなスポーツ観の特徴—1990年代の読売新聞と朝日新聞の事例を手がかりに—」『スポーツ史研究』29, pp. 67-82.
- [31] 長倉富貴, 2016, 「アスリート学生支援についての一考察」『山梨学院大学経営情報学論集』22, pp.19-41.